

精神疾患を持つ学生のリカバリーに関する質的研究

ーソーシャルワーク実習体験を中心にー

○ 東京福祉大学 氏名 谷口 恵子 (9122)

鹿内 佐和子 (東京福祉大学・9130)、姜 壽男 (東京福祉大学・8504)

キーワード3つ：ソーシャルワーク実習、リカバリー、精神疾患

1. 研究目的

日本学生支援機構による「平成 26 年度短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援における実態調査」によると、高等教育機関における障害学生在籍率は 0.44%であり、調査を始めた平成 17 年度の 0.16%に比べ、倍以上に増えている。障害学生構成比を見ると「診断書有の発達障害」が 19.3%、「精神疾患・精神障害」が 20.0%を占めており、障害学生のおよそ 4 割をこれらの学生が占めていることになる。近年、障害学生に対する支援を専門に提供する「障害学生支援室」等の部署を設ける大学も増えてきており、支援体制の構築を試みている。しかしながら、ニーズ把握が難しく、個別対応が必要となる精神疾患を抱えた学生に対する支援はほとんど実施されていない。さらに、実習教育においては、学外機関との連携が不可欠であるが、その支援の在り方についての研究は数少ない。障害を抱えながら、社会福祉士・精神保健福祉士の国家資格取得を目指し、高等教育機関に入学してきた学生に対しての適切な支援の在り方を見出すことは、専門職養成機関としての責任であると考えられる。本研究においては、精神疾患を持つ学生が、個々人の実習体験の中でリカバリーにつながった要素を見出すことを目的とし、ソーシャルワーク実習教育におけるサポートの在り方を考える一助とした。

2. 研究の視点および方法

リカバリーは、1980年代後半のアメリカ合衆国において、精神障害をもつ方々の手記活動から生まれた概念であり、その定義は様々ある。本研究においては、リカバリーを「病や障害に圧倒されたとしても自分らしさや日常生活、そして自分の人生を取り戻すことができる」(野中 2011) という理念とし、「障害があるがゆえに発見された新たな生き方」と定義する。障害当事者である学生が、福祉専門職を目指すことは学生自身にとっても、また支援を受ける側にとっても大きな意義があると言える。しかしながら、障害を抱えながら学外で実施される実習を全うすることは大きな困難を伴い、大学側また実習受入れ施設側の適切な配慮が何よりも重要である。本研究は、精神科に通院していて、何らかの診断をされたことがあり、ソーシャルワーク実習を体験した3名を対象とした。実習生本人の視点から体験を振り返ることを目指し、実習終了後にインタビューを実施した。研究方法として、その時々を経験を時系列ごとに並べて整理し、社会的・文化的な背景との関係で捉え記述することを目指し、質的研究法の一つであるTEM (複線径路・等至性モデル：

Trajectory Equifinality Model) を活用し分析した。サトウ (2006) によるとTEM は、「あ

る主題に関して焦点をあてて研究をする時に、人間の行動、特に何らかの選択とその後の状態の安定や変化を、複線性の文脈の上で描くための枠組み」である。本研究における等至点（等しく至るとして研究者が焦点を当てた点）を「障害と付き合いながら、実習体験を活かして仕事につく」とし、3人に共通するSD（Social Direction, 社会的方向付け：等至点に至る過程において阻害・抑制的な影響を及ぼす事象）、SG（Social Guide, 社会的ガイド：等至点に至る過程において促進的な影響を及ぼす事象）を見出した。

3. 倫理的配慮

本研究は東京福祉大学倫理・不正防止専門部会により承認を得ており、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理に基づき、調査対象者に対して研究の目的及び研究結果の使用については個人情報の保護を厳守することを書面で説明し、同意を得ている。

4. 研究結果

3人のインタビューをTEMによって分析し、共通するSGとして、①実習先に障害をオープンにした結果得られた職員からの適切な配慮と指導、②実習体験中得られた達成感、③家族の物理的・精神的サポート、④精神科医やソーシャルワーカーなど専門家からのサポート、⑤障害に対する大学教員の理解と対応が挙げられた。これらを通して、学生たちは自信を得て、新しい視野や方向性を見出し、障害とつきあいながらも、それぞれの生き方をみつけ、仕事に就くという結果に至っていた。

一方、SDとしては、①画一的な学校・企業風土、②社会人として求められる臨機応変さや失敗が許容されない雰囲気、③社会に存在する障害に対してのマイナスイメージ、④精神疾患をオープンにした上での就職の選択肢の少なさと難しさが挙げられた。結果として、障害をオープンにして希望の職種（ソーシャルワーク専門職）に就かずに、障害をクローズドにしての就職や自身でNPOを立ち上げることに繋がった。

5. 考察

学生たちは精神疾患に伴う不安を抱えながら実習に臨むも、そこで得られた達成感から社会福祉士、精神保健福祉士の資格取得動機が高まり、次の目標を見出していた。それぞれの生き方をみつけるにあたり、実習体験の影響の大きさが明らかになった。しかしながら、実習では障害をオープンにしてプラスの体験が得られつつも、社会に出る際には障害をクローズドにするという選択をし、「実習」と「仕事」の間に大きな壁があることを示す結果となった。さらに、「障害」に対する社会のマイナスイメージが、「完璧を目指さなければ」「もっと頑張らなければ」「迷惑はかけられない」など学生たちにプレッシャーを与えていることも示唆された。障害をオープンにして仕事ができる環境や、制度・政策づくり、社会の中での精神疾患に対する理解を促す啓蒙活動の必要性が課題として見出された。

【参考文献】 野中猛（2011）『図説 医療保険福祉のキーワード リカバリー』中央法規

サトウタツヤ（2006）「発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線経路等至性モデル」『立命館人間科学研究』12, 65-75.